# 堀川遊覧
## ～船頭さんに学ぶ～

石倉歩美・周藤　彩

■左から、今林さん、石倉さん、飯塚さん。

平成九年の運航開始から現在まで、松江観光の人気施設として多くの人々に親しまれてきた堀川遊覧船。松江に一度でも来たことのある人なら、あの松江城をぐるりと囲んでいる堀を巡る船に乗った、もしくは、見たことがあるという人は多いと思います。今回私たちは、その堀川遊覧船の船頭さんという仕事に着目してみました。

実際、身近にある観光名所なのですが、「船頭さんってどういう職業なんだろう？」「どうやったらなれるんだろう？」というように様々な疑問が浮かんできます。この度は、今林隆さん（60）、石倉純二さん（63）、飯塚武志さん（68）の三人の船頭さんからお話を伺いました。

### 船頭さんになるには？

堀川遊覧の船頭さんになるためには、普通の会社と同じように面接試験があるそうです。一番重要なのはどれだけ松江を愛しているかという点で、情熱を持っている人なら他県の人でも大歓迎とのことでした。実際、米子市や境港市、安来市の布部、雲南市の三刀屋や掛合など松江市外から通っている人も何人かいるそうです。

でも、船を運転するんだから免許を持ってなくちゃ駄目なんじゃ……と思われるかも知れませんが、なんと、免許の有無にかかわらず誰でも採用試験を受けることが可能です。今年の採用者も約半分は免許を持たない人という結果に。もちろん、無免許で運転するわけにはいかないので、合格後に免許取得の講習に行かなければなりませんが……。

また、誰でもと言いましたが、船頭さんには年齢制限があります。男性は五十五歳以上でないといけません。なので、定年退職した後に船頭さんになる人が多いそうです。もちろん、船頭さんにも定年があります。七十歳です。みんな、体がもつ限り続けるとのこと。くれぐれも無理しすぎないで欲しいです。なお、女性については五十五歳以上という制限はありません。いくら若くてもよいそうです。どうしてなんでしょう？

### セカンドライフ

現在、堀川遊覧で働いている人は、事務が十一人、窓口が八人、そして船頭さんは百十人。女性船頭さんは一割ほどだそうです。船頭さんの平均年齢は六十四歳と高め。一日四、五時間の勤務で月に十七、八日ぐらい働きます。

それほど厳しくないと思われますが、夏は日光の反射により声が出ないほど暑かったり、冬はカイロを貼って服を着込んでも死ぬほど寒かったりと、辛いことも多いようです。でも、体を壊したりしない限り、自らやめるという人はいないそうです。みんな前の仕事では自分の時間をとるほどの余裕がなく、毎日仕事に追われているような感じだったので、今の仕事をとても楽しんでやっていると言っておられました。

様々な職業出身の人が揃っているのも楽しさの原因のひとつ。分からないことは誰かに聞けばたいていのことは解決できるので、皆で協力し合って仕事をしているそうです。かくいう飯塚さんは元ホテルマン、石倉さんは元製薬会社営業マン、今林さんは元体育教師と、見事にばらばらの職業です。

## 楽あり、苦あり……

お客さんと直接接する仕事のため、お客さんの反応がダイレクトに伝わってきます。船頭さんの話を聞いて手を叩いて喜んでくれたり、後から手紙を書いてくれたりする人もいます。それはとても嬉しいことだそうです。中には、船頭さんの話に聞き入っていたために、カラコロ広場で降りる予定が乗り過ごして一周してしまったなんてことも！　お客さんの予定の邪魔をしてしまったのではないかと心配になったものの、「あまり楽しくて降りるのを忘れていた」と言われたときは、とても嬉しかったそうです。

しかし、嬉しいことばかりではありません。逆に困ったことも……。しっかり勉強して来たお客さんが細かい質問をして船頭さんを困らせることがよくあるらしいです。もちろん、嘘を教えてはいけないので、わからないときは勉強不足だったとちゃんと謝るそうです。中にはユーモア溢れる返しかたをする人もいます。そして、答えられなかったことはちゃんと調べるというように、とても勉強熱心に取り組んでいます。

また、観光客の中には外国から来る人も多く、そのために外国語教室も開かれているのですが、こんなエピソードも……。アメリカ人の家族を乗せたとき、付け焼刃の英語で話しかけたところ、子どもに英語が話せると思われてしまったらしく、船に乗っている間、ずっと英語で話しかけられたとのこと。これには結構まいってしまったそうです。

仕事をしていると、このように様々なことがあるのですが、観光業であるため、なんといってもお客さん第一！　船頭さんの船上での話には一応マニュアルはあるものの、皆が色々な工夫をしています。なので、船頭さん一人一人で話が異なり、また、その話も客層によって使い分けているので、どんな人たちと乗り合わせるかによっても違う話を聞くことができます。堀川遊覧船は一度乗ったからもういいや、というものではありません。奥が深いのです。

（いしくら・あゆみ／日本語文化系一年生）

## 橋がたくさん架かっています

船頭さんたちからたくさんお話を聞かせていただいた後、石倉さんが運転する遊覧船に乗せてもらいました。

遊覧船は一周五十分ほどですが、その間に、十六の橋の下をくぐります。うち四つの橋はとても低いので、通るときには遊覧船の屋根が倒されて、どんどん下がってきます。私たちも体験しましたが、腰をかがめて橋の下を通るのは、なんだかちょっと冒険気分で楽しかったです。

橋にはそれぞれ個性があり、東京橋、新米子橋、宇賀橋などなど、いろんな橋を通ることができました。

## 落ちた人は……

「堀川に落ちた人はいますか」と尋ねてみると、石倉さんの答えは「いますよ」。お年寄りが、船の乗り降りをするときに、川に落ちてしまうことがあるそうです。そのため、今では安全のために、船の乗降口に丈夫な手すりが設置されてい

■（上段）大雪で倒れた木。（下段）花壇に植えられた紫陽花。

です。でも、気を付けてください！

## 生き物たち

車で取材に向かう途中、堀川で船に乗り、網のようなものを持っている人々を見かけました。まさかシジミを獲っている、なんてことはないだろう。堀川にシジミはいないだろう。と、不思議に思っていたのですが……。ところが、船頭さんに聞くと、堀川にはシジミが獲れるスポットがあるそうです。あの方たちはシジミを獲っていたのでしょうか。

子どもたちが喜ぶ、という亀にも会うことができました。天気のいい日は甲羅干しをしている姿がよく見られるそうです。緑豊かで生き物の多い堀川沿いですが、今年の冬の大雪で、長い歴史を持つ胡桃の木や竹が折れてしまいました。遊覧中にたくさんの切り株を見つけました。景観を損ねるので、折れた木や竹の多くは切らなくてはならなかったそうです。木々の伐採は大変残念だったと石倉さんはおっしゃっていました。

## 船頭さんの話術

船に乗っていて改めて「すごいなぁ」と感じたのは、船頭さんの話術です。その日のお客さんの年齢によって話す内容を変えるという石倉さん。子どもがたくさん乗っているときには亀などの動物の話、大人が多いときには松江の歴史などについてお話しするそうです。観光客はもちろん、松江に住んでいる人でもなかなか知らないような、松江城誕生の話や、松江を訪れた文豪の話などを、たくさん聞くことができます。

遊覧船から見ることができる松江の名所の説明はとてもためになり、しかも途中では「松江舟唄」という歌も歌っていただきました。あったかい歌声で、とっても素敵でした。

船頭さんのお話は本当に面白いのですが、残念ながら、船が住宅地沿いの米子川にさしかかると、しばらくお話はやめなくてはなりません。しかし、ここで私たちの目を楽しませてくれたのは、たくさんの花壇に植えられた花々でした。私たちが取材に行った日には、紫陽花が咲いていました。「だれがなんのために？」と思ったのですが、園芸の好きな船頭さんたちが、園芸班をつくって世話をしておられるのだそうです。

■帰りに亀の像を発見!!　甲羅のハートに触るといいことが……？

船が住宅地に入ると、近所迷惑になってしまうため、船内でマイクを使うことができません。話をする代わりにお客さんを楽しませる方法はないか？と考えたのだそうです。花壇の周りの草抜きは船頭さんが船で出動してやるのだそうです。みなさんの「おもてなしの心」を垣間見ることができました。

船頭さんたちは皆さんとてもパワフルで、「お客さんを喜ばせよう！」という熱意にあふれているなぁと思いました。県外から来た観光客の方以上に、島根県に住む人にこそ一度は乗って欲しいです。取材に協力してくださった皆さん、ありがとうございました。堀川遊覧船は始まって十四年とのことですが、これからもよろしくお願いします！

（すとう・あや／日本語文化系一年生）

ます。それでも万が一のために、下着なども用意しておられるそうです。船には救命用の浮輪も置いてありました。遊覧船ではお年寄りの方もたくさん楽しんでおられるので、いかにも丈夫そうな手すりを見て、「これで安心ですね！」とほっとした私たちでした。船頭さんたちがこんなところにも気をつかっておられるなんて知らなかった……。

しかし、堀川に落ちるのはお客さんだけではありません。時には船頭さんたちも船から落ちているのです。船頭さんたちの間には「どぼん会」なる会が存在するそうです。いちばん多く堀川に落ちた人が会長をつとめるこの会、現在会員は七、八人。もっとも落ちやすいシチュエーションは、船から船へと渡るときだそうです。船頭さんにはお茶目な方が多いの

# ブルーベリー農園を訪ねて

## 奥出雲町橋本農園

藤原星子

私が最初に島根県奥出雲町大谷にある橋本農園を訪れたのは五月上旬のことでした。橋本守庸さんと奥さんの抄由美さんがブルーベリーなどの果実を中心に栽培しておられます。

私はブルーベリーが大好きです。ヨーグルトには必ずブルーベリージャムを入れて食べます。しかし、よく考えてみるとブルーベリーをそのまま食べたことがなく、どのように作られているのかも知りませんでした。そこで、この近くでブルーベリーを栽培している所はないか探しました。奥出雲町にはブルーベリーを作っている農園がいくつかありましたが、栽培面積が大きい橋本農園に決めました。

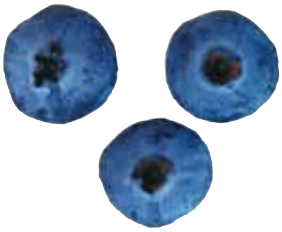
■はじめての摘み取り体験。

### 橋本農園を探せ！

奥出雲町に到着したものの、橋本農園の場所がわからず、道行く人に尋ねながらやっとの思いで辿り着いたことを覚えています。町の人に教えてもらい進んでいくと「よこた　だんだん市場」という農産物直売所がありました。そこで橋本農園へ行く道を聞こうと思い店員さんに話しかけたところ、偶然にもその人が橋本守庸さんの奥さんだったのです！

奥さんの抄由美さんはアポなしで訪れたにもかかわらず、親切に橋本農園への道を教えてくださり、色々とお話も聞かせていただきました。その後、奥さんに書いて頂いた地図を頼りに道を進んで行き、ようやく辿り着くことができました。細い小道を抜けた先に広がる農園は、自然を生かした状態で、たくさんの樹が植えられていました。しかし、訪れた時期はまだブルーベリーの収穫時期ではなかったため、近づいてみても何の樹か、よくわかりませんでした。

この橋本農園は、もともと森林だった場所を



■ブルーベリー農園。

やるなら負担の少ない果樹を中心にしていこうと決めていました。しかし、定年を待たずに四九歳のとき会社を辞め、ここ奥出雲にやってくることを決意したのです。

初めはどの地域に行こうか迷っていたそうですが、インターネット検索で島根県奥出雲町に、県と町の所有地で耕作希望者がいない土地があることを知りました。実際に見に来たところ、「これだけのまとまった広さの土地を手に入れるには、他では北海道くらいしかない。しかし、西の方の出身であることから北海道に向かうのは難しい」と考え、奥出雲町で今の農園を始めることを決めたそうです。

切り開いて作られた農園で、約五・五ヘクタールの広さがあり、ブルーベリーのほかにもプルーン、そばなどが栽培されています。野菜のハウスもありました。

## 橋本農園誕生秘話

橋本守庸さんは愛媛県新居浜市の生まれで、四九歳になるまでは新潟県西部にある化学工場で働き、農業とは無縁の生活をしておられました。でも、実家が農業を営んでいたことや遊学の経験から、定年後は道楽で農業をしたいと考えていたそうです。その頃から、老後に農業を

最初は家族を新潟に残し、橋本さん一人で未知の土地に移り住んだそうです。もともとは森林だったという土地を耕し、農園の形にしていくことは容易いことではなく、苦労や不安も多かったと思います。ブルーベリー栽培を始めるにあたっても、どんな果実がこの土地に適しているか、様々な果実を試してみたそうです。そして今もブルーベリー以外にも栽培できるものはないかと模索しておられます。橋本さんは、「都会の生活と比べたら不便で大変なことも多いけど、農作業をしながら、のんびり過ごせるのがなによりうれしい」と語ってくれました。

## 若き日の農業体験

橋本さんのお話のなかで、二十代のころの海外遊学についての経験談もお聞きすることができました。橋本守庸さんは大学卒業後、半年間の予定でインドへ遊学しました。しかし遊学のおもしろさを知り、予定を引きのばしてさらに西へ向かったそうです。

インドからアフガニスタンへ行き、さらに西へ向かいイスラエルに辿り着きました。そこで資金が尽きたため、キブツという農業共同体のお世話になります。集団で農業をし、共同生活を送るというものでした。そこでは、バナナやオレンジを作っており、この経験が農業に興味を持つきっかけになったそうです。

## 農園のアイドル

橋本農園を初めて訪れたとき、ブルーベリーの樹のあいだに何か黄色いものがあるなと思って見ていると、ガサガサッとすごいスピードで走り去っていきました。はじめは「野生のキツネか!?」と思ったのですが、橋本さんに聞いてみると、ハルちゃんという名前の柴犬を飼っておられ、この農園の番犬をしていることがわかりました。

ハルちゃんは橋本さんが単身奥出雲に移り住むときに一緒に連れて来たそうで、農園と同い年の十一歳になります。初めて会った時はものすごい勢いで吠えられましたが、橋本さんとお話を始めるとすぐに懐いてきてくれました。本当に人懐っこく、お話を聞いている間も静かに橋本さんのそばに寄り添っていました。ハルちゃんは基本、放し飼いにされていて、ブルーベリーの摘み取りにくるお客さんを熱烈にお迎えしてくれます。ハルちゃんは橋本農園の大事な看板娘なのでした。

■（上段）橋本さんのお話を聞く筆者。（下段）ハルちゃんにブルーベリーをあげてみた。

■初めて食べる生のブルーベリー。

## いざ、摘み取り体験！

ひととおりお話を聞いた後、ブルーベリーの摘み取りをさせていただきました。五月に初めて訪れた時は何の樹かわからなかったブルーベリーも、取材に行った七月初旬にはみずみずしい葉っぱをつけ、その葉っぱの間からたくさんのかわいらしい実が顔をのぞかせていました。白、ピンク、紫など様々な色のブルーベリーがなっています。濃い青紫色になると収穫時で、前日が晴れて日差しが強いとさらに甘いブルーベリーがとれるそうです。

ブルーベリーの摘み取りにはハルちゃんも一緒に行きました。ハルちゃんもブルーベリーを食べるそうですが、その時はお腹いっぱいだったのか、食べてくれませんでした。

ブルーベリーの実はとても大きくて、キラキラと光っているように見えました。食べてみると、ブルーベリーの酸味と甘みが口いっぱいに広がり、生のブルーベリーはこんなに美味しいのか！と驚かされました。持ち帰り用にパックも用意して下さったので、たくさん摘んで詰めました。

## ブルーベリー農園の魅力

橋本農園では主に二種類のブルーベリーが栽培されています。ひとつはハイブッシュという主に生食向けのブルーベリーで、六月下旬～八月中旬が収穫時期です。私たちが橋本農園を訪れた時はちょうどこの種のブルーベリーを収穫することができました。もうひとつはラビットアイという主にジャムなど加工向けのブルーベリーで、七月下旬～九月下旬が収穫時期です。

橋本農園で収穫されるブルーベリーは主にそのままパック詰めして出荷され、スーパーや「よこた　だんだん市場」という産直市で販売されます。

奥出雲町では、橋本さん以外の農家でもブルーベリーが栽培されていて、ジャムやブルーベリー酢、ブルーベリージュースなどに加工されています。また、橋本農園では、収穫時期には摘み取り体験も行っています。とくに宣伝はしていませんが、口コミでお客さんの輪が広がり、毎年訪れるリピーターのお客さんもいるそうです。

橋本さんは、できるだけ自然に近い状態でブルーベリーを育てるために、背の低い雑草は刈らずにそのままにし、農薬もまったく使わない自然農法を実践しておられます。奥出雲の山間から湧き出る、ミネラルを豊富に含む石清水が、甘くて美味しいブルーベリーを育てるとおっしゃっていました。

現在では、都会の近代的な生活を抜けだし、自然のなかでのんびりとした生活が送りたいと、都会から田舎へIターンしてくる人も増えてきています。自然に囲まれた地で暮らすのは気持ちがいいし、健康にもいい。また自然のなかで生活することによって、現代の生活を見直すきっかけにもなったと橋本さんは語ってくれました。

■看板娘のハルちゃん。

今回、橋本農園にお邪魔し、たくさんのお話をお聞きしましたが、農園を始めるまでの経緯や栽培のこだわりについてのお話が特に印象に残りました。ブルーベリーが大好きな私にとって、今回の取材でブルーベリーの魅力を再発見できたと思います。また、橋本さんの若い頃の経験談なども聞かせていただき、農業を始めるまでに様々な経緯があったということに驚きました。自分がしたいと思ったことを実現するにはたくさんの苦労があると思いますが、橋本さんのように夢を持って行動していくことは、人生を楽しくするのに大切なことだと感じさせられました。ブルーベリーのかわいらしさとそれを育てている橋本さんの笑顔が忘れられません。

（ふじはら・しょうこ／文化資源学系二年生）

# 和の心 日本の音

森山美季

和楽器。ピアノやヴァイオリンのように華やかな洋楽器とは違う、日本の心。吹奏楽やオーケストラばかりが注目されているこの時代に、和の音に触れたことがある若者はそう多くいない。そんな日本人が忘れかけている日本の心、和楽器を専門に扱っているお店が米子にあることを、皆さんはご存知だろうか。

米子市東倉吉町の本通り商店街。アーケードの商店街入り口付近に店を構える三国屋楽器店。ここは創業して百年以上にもなるという老舗で、山陰地方唯一の和楽器専門店だ。

## 知られざる三味線の真実

笑顔が素敵な三代目店主・田村武さん。三国屋楽器店は田村さんのお祖父さんが始められたお店だ。創業当初は三味線と和紙を扱っておられたが、現在は琴や三味線、尺八、太鼓や扇子などを扱っておられる。

■店内に陳列されている三味線。

さて、三味線の皮が一体何の動物のものなのか、聞いて驚かない人はいないのではないだろうか。なんと、犬だ。最近は主に東南アジアから輸入されているそうだ。以前は猫の皮を使用していたが、猫の皮は高価な上に脆く破れやすい。だから今では多くが犬の皮なのだそうだ。

「皮、持ってきますわ」。お店の奥から戻ってこられたご主人の手には、何やら紙のようなものが。これが三味線に使われる皮なのだという。当然ながら元々は犬だったなんて微塵も感じない。触ってみるとざらついていて、何だか厚紙のようだった。

## 皮を張る

店の奥にある作業場を見せていただいた。するとそこには見たことのない道具がたくさん並んでいた。「散らかっていて……」とご主人は苦笑い。実際に作業場に座り、いろいろな道具を手にしながら三味線の皮の張り方を教えてくださっ

■三味線に張る犬の皮。色が薄くなっているところは関節などの部分。

た。

三味線の皮を張る際、接着剤となるのが餅糊だ。これを胴の接着面に塗り、皮を張る。しかし、ただ張ればいいというものではない。強い力でピンと張らなければならないのだ。

まず皮に胴の型を取る。それを湿らせ、木栓という木製の大きなクリップで挟む。これを胴の一辺に五個ずつ、四辺で計二十個も使うそうだ。これを、専用の台に乗せた胴に被せる。台の棒状の部分と木栓とに紐を引っ掛け、締め上げることで皮を張っていく。この専用の台は二重構造になっていて、上の段と下の段の間に木製のくさびを打ち込むことによって、より強く皮を張ることができる。そして小さな棒で紐を捻り、さらに強く張る。あとは接着面を削いで電気コンロで一時間炙るなどの工程を踏み、作業は終了だ。

■三味線の皮を張る様子。ご主人が手に持っておられるのが木栓。専用の台に置いてある三味線の胴。

お話を伺っているときはそれ程長くは感じなかったこの工程、文章にしてみるとやたら難しく、やたら長い。

## 琴の世界　先駆者の存在

今回の取材で特に話が盛り上がったのが、琴についてだ。このお店で琴が扱われ始めたのは昭和に入ってからだそうだ。それまでは琴の需要はほとんどなかったのだという。

お正月によくテレビで流れる『春の海』という曲。この曲の作曲者・宮城道雄さんは、琴のバイエルのようなものを初めて作った人だ。そこから琴は普及していき、需要も高まってきた。「この人がいなかったら、琴の世界は寂しいものだっただろう」とご主人は語る。

実は私は高校時代、邦楽部に所属していて、三年間琴を弾いていた。このお店に展示された綺麗な琴を見て、私のテンションは鰻登り。しかもご主人は私たちの目の前で琴を演奏してくださって、言葉に表せないほどの感動を覚えた。

明治の頃から、琴の多くは広島県の福山市で生産されているそうだ。他地域にも生産者はいるが、量産しているのは福山だ。しかし、ここは琴の材料の産地というわけではない。

琴の胴体の部分はたいてい会津桐でできていて、中は空洞。そして内側には何やら模様が彫ってある。この模様は音響をよくするためのものだそうだ。

■（上段）店内に陳列されている琴。（下段）琴の内部にはギザギザの模様が彫ってある。

琴の弦は、昔は絹で作っていた。しかし絹の弦は切れやすいこともあって、今では切れにくいテトロンという合成繊維の商品が主流なのだそうだ。

## 光る職人技

三国屋楽器店は楽器を売るだけでなく、琴の弦の張り替えや三味線の皮の張り替えなどもしておられる。箏曲部のある地元の高校からは、一度に十数面（面は琴の数え方）もの注文がくるそうだ。しかし弦を張る作業は力仕事。一度にそうたくさんはできない。このように多くの注文があると、すべて張り替えるのに数日かかる。

■琴の弦の張り替えは、傷んだ部分を切り取り、その分弦をずらして張り直す。この蝶々みたいに輪になっている部分はそのための弦の予備なのだそうだ。

■琴の弦を締める様子。（左）締める前の琴。（中）一番外側の弦を締める様子。（右）さらに締める様子。（下）二本完成。

琴の弦を一面張るのにおよそ一時間半もかかるという。琴は十三本ある弦のすべてを同じ力で張らなければならないので（ちなみに十三本の弦の太さはすべて同じ）、やはり神経を使うのだろう。

ご主人は実際に琴の弦を締める作業を見せてくださった。三味線の皮を張る作業場からさらに奥にある部屋へ案内してくださった。ご主人は琴を一面取り出し、弦を締め始めた。とても力強く締めておられたのはよくわかったのだが、正直、何をどうやっておられるのか全くわからなかった。気がついたらもう一本目の弦は締め終わっていた。

もう一度見せて欲しいとお願いし、今度は見逃さないようにじっとご主人の手元を見つめた。まず、締める弦を一本、手の平サイズの円柱状の木材に数回巻きつけ、それを強く引っ張る。ちゃんと張れると弦を木材から外し、はみ出ている弦をその弦が通してある穴の所で弦に巻きつける。そうやってきっちり留め、一本終了だ。

見ているだけで、かなりの力を必要とすることが伝わってくる。それをあの速さでやるなんて、まさに職人技。

## 箏曲に深みを――伴奏役、十七弦

琴は弦が十三本のものの他に、十七本のものがある。これを十七弦と呼ぶ。十七弦は十三弦より三十センチ程長く、幅も広い。ご主人は弦の張ってある中古の琴を持ち出し、十三弦と同じようにまた演奏を聴かせてくださった。

十三弦の高く細い音とはまるで違う、深くずっしりとした音。高校のときに私が担当していたのは実はこの十七弦。私は十七弦の安定感のある重い音がとても好きだ。「十七弦はコントラバスのような存在。これがあると琴の演奏が全然違った深みのあるものになる」とご主人。ちなみに十七弦を考案したのは宮城道雄さんだそうだ。

「このお店を継ごうと思われたきっかけは？」。返ってきた答えは意外なものだった。「まあ、成り行きというか、やむを得ず」と苦笑するご主人。一瞬ぽかんとする私。高校を出てすぐに三代目として三国屋楽器店を継いだそうだ。

昭和四十年を過ぎた頃が一番よかったとご主人は振り返る。その頃は宮城さんのおかげで琴が普及し、一月に二十面も売れることもあったそうだ。今では一月に二、三面注文がくればいいほうなのだという。

若者は仕事などの目先のことで手一杯で、何かの稽古を始めるゆとりがない。加えて、琴をやってみようと思う人自体とても少ない。その上、指導する側の人も次々と引退してしまって、和楽器人口は減るばかり。今の時代をそう語るご主人は、寂しいですねと仰っていた。「芸でも、人間的にも、いい指導者がいるといいですがね」と。

終始笑顔でお話を聞かせてくださり、素晴らしい琴の音を聴かせてくださった田村さん。私が松江キャンパスで邦楽サークルを立ち上げたいと話すと、花咲く笑顔で「協力したい」と仰ってくださいました。

余談ですが、琴は正しくは「箏」という漢字を使います。「琴」という漢字は少し違う楽器のことを指してしまうのだそうですよ。

（もりやま・みき／日本語文化系一年生）

# 魅力いっぱい！ 御来屋の旅

門脇志帆

今回私がお邪魔したのは、鳥取県西伯郡大山町にある御来屋（みくりや）です。何を記事にするか迷っていた時、編集長が助け船を出して下さいました。「門脇さんの出身の鳥取県には、御来屋っていう山陰で一番古い駅があって、郷土料理にはサザエのへか焼きというものがあるらしいよ。面白そうだから記事にしてみたら？」。この言葉を受け、取材の下見ということで初めて御来屋の地を訪れました。自然が豊かでとても素敵な御来屋の地。すぐに記事にすることを決めました。

## 御来屋駅

七月九日、午前八時二〇分に短大を出発。この日は快晴で、安来のあたりから大山がよく見えます。

最初に訪れたのは、山陰最古の駅舎が残る「御来屋駅」です。明治三十五年（一九〇二年）十一月一日、山陰地方で初めて、境港・御来屋間に鉄道が開通しました。その当時の駅は、境、大篠津、後藤、米子、淀江、御来屋の六か所だけでした。しかし今では、開通当時の面影を残しているのは、御来屋駅のみとなってしまいました。

さすがは百年以上の歴史を持つ御来屋駅。中に入ると、どこか懐かしさを感じる雰囲気が漂い、駅のホームに入ると、目の前には鳥取県が誇る大山が堂々とそびえ立ちます。

駅は平成十四年に改修が行われ、駅舎を利用した「みくりや市」がオープンしました。地元で採れた野菜や、地元の方が手作りされた豆腐やパン、手芸品など品揃えも豊富です。

私たちがお邪魔したのは九時過ぎ。開店時間の九時三〇分まではまだまだ時間がありましたが、すでに約十人の方が並んで待っておられました。そこで、お客さんにみくりや市の魅力を伺うと、「やっぱり新鮮だからね～」と皆さん口を揃えておっしゃいます。野菜はその日の朝に地元農家の方が持って来られる新鮮なものばかり。皆さんが朝早くから足を運ばれるのも納得です。

この日は土曜日ということもあってか、十分間で四十人以上のお客さんが来店されました。皆さんお目当てのものが決まっているのか、ものすごい勢いで入店され、ものすごい勢いで帰って行かれます。やはり時期だからでしょうか。スイカを手にお店から出てくる人が多く見受けられました。

## 御来屋漁港にて

お店の方があまりにもお忙しそうなので、一旦みくりや市を離れ、駅から車で五分ほどの場所にある「御来屋漁港」にお邪魔しました。

漁港に着くと漁師さんを発見!! お名前を伺うと亮太さん

■御来屋駅ホーム。

■駅舎内にあるみくりや市。

■（上段）御来屋漁港。（下段）亮太さんと楽しくお話。

という方で、いきなりお話を伺ったにもかかわらず、快く質問に答えてくださる素敵な方でした。

亮太さんは漁師になって八年目。この日は漁止めだったらしく、漁港におられたのは亮太さんだけでした。いろいろお話を伺っていると、亮太さんは鳥取県出身ではないことが判明!! なんと、漁師になりたくて埼玉からIターンで御来屋に来られたそう。他にも、大阪からIターンして来た方もおられるそうで、夢を叶えるためにここまでするなんて、かっこいい!!と感動してしまいました。

「鳥取の方言とか理解するのが大変じゃなかったですか?」と聞くと、「そうだね~」と苦笑。やはり鳥取の方言には癖があるよう（笑）。Iターンの大変さを教えて頂きました。

亮太さんとお別れをして、次にお話を伺ったのは近くにおられた釣り人さん。

「こんにちは。私たち、島根県立短期大学の者です。『のんびり雲』という雑誌を作っています。お話伺ってもよろしいですか?」

私たちが自己紹介をすると、「学生さんか~。どこから来たかね?」「何を勉強しとられるの?」と、逆に私たちが質問攻めに（笑）。

この日は、お友達と倉吉方面から来られて八時三〇分頃から釣りをされているそうです。「フグが邪魔でなかなか釣れんよ」と、のんびり釣りを楽しんでおられました。とても気さくな方で、ついつい長居をしてお喋り。こうしてのんびり釣り人さんとお話をするのも、一つの御来屋の楽しみかもしれません。

次にお邪魔したのは、釣り人さんもおすすめの「お魚センター みくりや」。一階は新鮮なお魚の直売所、二階は漁港で獲れた新鮮なお魚を頂ける地魚料理店になっています。

並んでいるお魚や貝は生き生きしていてとても美味しそう。すぐ近くの漁港で獲れたお魚が買えるとあって、お店の中は買い物に来られた方々でごった返していました。とてもお忙しそうで、お話を聞けなかったのが残念でした。

■（上段）駅舎内にある小荷物運賃表。（中段）窓口に飾られた紅茶列車のヘッドマーク。（下段）みくりや市の開店を待つ二人。

■釣り人さんと、のんびりお話。

## 陣構紅茶を頂く

御来屋漁港をあとにして、「みくりや市」に戻って紅茶を頂くことにしました。開店時よりはお客さんの数も減り、お店の方ともゆっくりお話し出来るようになっていました。

ここでは「陣構（じんがまえ）紅茶」という紅茶を販売しておられ、「みくりや市」内の小さな喫茶コーナーで飲むこともできます。陣構紅茶とは、約三十年前から無農薬・有機農法にこだわって、大山山麓の標高三〇〇メートルの丘陵地で栽培されている茶葉から作られる紅茶です。他にも煎茶や「りんご」「ゆず」「二十世紀梨」などの果実ティーもあります。

私たちも陣構紅茶を頂くことに。お店の方が目の前で淹れてくださいます。早速頂いてみると、とてもよい香りがして、さっぱりした飲みやすい紅茶でした。

ここで、ゆっくりお店の方とお話。「み

■みくりや市の中にあるミニ喫茶で一服。

くりや市」について詳しく聞いてみると、古い駅舎を再利用した「みくりや市」は平成十四年にオープンし、地元の農家や工房から数多くの商品が出品されるそうです。手作り豆腐は、近くのトレーニングセンターで作られており、水曜日と土曜日にお店に並びます。他にも、手作りのパンやお餅などを出荷される方もいて、「カラス天狗工房」さんが作るラー油などもあるそうです。なんだか見ているだけでも楽しそうな品揃え。

私たちが、紅茶を頂きに再び訪れた一一時三〇分の時点で八十三人のお客さんが来られたようで、今までの最高来客数は一六〇人～一七〇人にまでなるのだとか。人気の秘密は品揃えの豊富さと新鮮さ。これだけのお客さんに愛される理由がよく分かります。私の家の近くにもあったらな～。御来屋の方々がうらやましい限りです。

取材の締めに、御来屋周辺をぐるっとドライブすることにしました。外の景色に目をやると、日本海と田畑が目の前に現れ、絶景が広がります。天候が良い日に訪れることができれば、この絶景に出会うことが出来るでしょう。

■新鮮さが売りの野菜たち。

時間に限りがあり、取材はここで終了。天気も良く、御来屋の人々の優しい人柄に触れることの出来た取材でした。今回の取材は車で訪れましたが、山陰本線に乗り、列車ならではのゆっくりした旅を堪能するのもいいかもしれません。この他にも御来屋周辺には、「名和神社」や「道の駅　めぐみの里」などもあります。魅力いっぱいの御来屋。とても楽しい取材になりました。

■（上段）陣構の茶畑。（下段）みくりや市で販売されている陣構紅茶。

## サザエのへか焼きを味わう

後日、私たちは御来屋の漁師料理である「サザエのへか焼き」作りに挑戦しました。

サザエのへか焼きとは、サザエをすき焼き風に炒めたもの。「へか焼き」の語源は、昔、農機具の「へか」（鋤（すき））を鍋代わりにして調理したことが始まりと言われています。

まずはスーパーに買い出しです。材料はサザエのほか、なす・赤黄ピーマン・玉ねぎ・もやし・しめじです。調味料は醤油・砂糖・酒とシンプルに。

買い出しを終え、いざ調理にとりかかります。しかし、不安な点が一つ。「きちんとサザエを取り出せるのか？」ということ。そんなところに、我が短期大学のクッキング研究会顧問である中塚先生が登場。見事な手さばきで、サザエすべてを綺麗に殻から出してくださいました。その後も、野菜の切り方など教えて頂き、ちょっとした料理教室に（笑）。

材料の準備が整い、予定していた試食メンバーの鹿野先生・安部さん・藤間さんも登場。中塚先生に具材を入れる順番を教わりながら、ホットプレートで調理を始めました。サザエを鍋の真ん中で炒め、周りで残りの食材を炒めます。色とりどりの食材のおかげで、色合いもばっちりです。醤油・砂糖・酒を加え、一煮立ちさせ、最後にショウガと青ネギを散らせば出来上がりです。

みんなの「わ～」という歓声とともに、サザエが取り合いに。待ちに待った試食会です。味はすき焼きですが、すき焼きにしてはちょっと変わった野菜たち。その野菜たちとサザエに味がしっかり染みていて、とても美味しかったです。先生も、「今までの試食会の中で一番だ」と言うほどの絶品ぶり。ぜひみなさんもご家庭で試してみてください。

今回取り上げた、御来屋の町。豊かな自然と暖かい人々に恵まれたとても良いところでした。ドライブで訪れるも良し、列車に乗って訪れ、ゆっくり町歩きをするも良し。色々な楽しみ方の出来る、御来屋。みなさんも一度訪れてみてはいかがですか。

（かどわき・しほ／文化資源学系二年生）

# 一畑電車で行く出会いの旅

辻畑裕子・上田絵里子
（イラスト）原田美恵子

## 一畑電車　乗客に聞く編

今回、一畑電車の記事を書こうと思ったのは、昨年の秋、「文化情報誌制作Ⅰ」という授業で一度取材し、その不思議な魅力が忘れられなかったからです。私は長崎県の出身ですが、映画『ＲＡＩＬＷＡＹＳ』の影響もあって、地元で「バタデン」の愛称で親しまれている一畑電車に一度乗ってみたいと思っていました。初めてバタデンに乗ったとき、こぢんまりとした車内の雰囲気と車窓から見える自然の風景に、すっかり魅了されてしまいました。

六月十九日、日曜日。雲が広がり、雨が降り出しそうなあやしい空模様の中、私たちはバタデンの旅に出発しました。松江しんじ湖温泉駅で一日フリー乗車券を買い、電鉄出雲市行き二一〇〇系にいざ乗車!!　今回はバタデンの乗客に突撃

インタビューを行う予定です。どんな出会いがあるのかなという期待感と、ちゃんと取材できるかなという緊張感の中、バタデンの旅はスタートしました。

一畑電車は、島根県東部の松江しんじ湖温泉駅から電鉄出雲市駅、出雲大社前駅までの全長四二・二キロを走るローカル電車です。車窓から見える宍道湖の眺めと出雲平野の田園風景が、バタデンの魅力をさらに引き立てています。ゆっくり、のんびり走る電車というイメージがあったのですが、いやそんなことはありません。実際に乗ってみると、結構速いし、すごく揺れるなという印象を持ちました。乗っているうちに徐々にこの揺れにも慣れてきて、帰る頃にはこの揺れが心地よく感じ、ついつい眠ってしまいそうでした。

行きの車中でお話を伺ったのは、単身赴任中の六十三歳の男性。千葉県出身で、しんじ湖温泉駅の近くに住んでいて、出雲市内の会社への通勤に一畑電車を利用しているとのことでした。約二年間、毎日乗っているそうです。「山陰に来てからどこか行かれましたか？」と尋ねたところ、石見銀山、出雲大社、境港などいろいろ行ったとおっしゃっていました。島根の印象は、町も人ものどかだということ。

次に一畑電車のことを伺いましたが、窓の外の景色は意識して見ていないとのことでした。もったいないですね。毎日乗っていると、なかなか見ないのかな？

最後に驚くべきエピソードを話してくださいました。帰りの車内でのこと。シートに横になって寝ていた人を見たそうです。きっとその乗客の方はお疲れだったのでしょうね。バタデンの車内ってなかなかおもしろいですね！

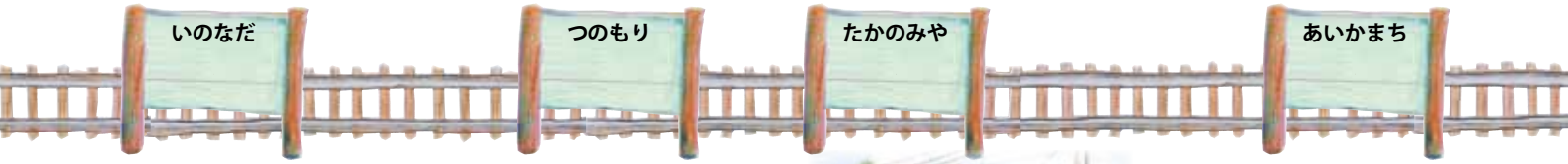
一畑口駅の特徴であるスイッチバック。スイッチバックとは、先頭車両が入れ替わり、今まで進んでいた方向とは逆に進むことです。運転士は鞄を持って反対側の運転席に移動します。この駅は、映画『RAILWAYS』で主人公が人生のスイッチバックについて語る、重要な舞台となった駅でもあります。

記念すべき瞬間を撮ろうと、カメラを持って待ち構えていたら……あれっ？ えっ？ 時間がなかったのか、慌てて走り、すぐさま後方車両に向かう運転士さん。想像していたのとちょっと違ったけど……リアリティーがある、おもしろい様子を目撃することができました。時間通りに運行するのも運転士の大事な任務です。バタデンの運転士さんはきちんと時間を守っていました。素晴らしいです！

川跡駅から電鉄出雲市駅に向かう車中でお話を伺ったのは、土江敏子さん。旧平田市在住の、八十歳になられる、笑顔がとても可愛いらしい方です。島根書道会の会員で、武志山荘で行われる六十周年の祝賀会に向かうために一畑電車を利用されたそうです。普段は車を運転されるそうですが、飲み会だから久しぶりに乗ったとおっしゃっていました。

土江さんは昔、女学校に通う交通手段として一畑電車を利用していました。当時は戦時中で、教科書もない時代

■（上段）車内でインタビューに答える土江さん。（中段）一畑口駅にて。急いで運転席に移動する運転士さん。（下段）東京から来られた女性２人組（左と中央）と車内にて記念撮影（右端は筆者）。



■（上段）出雲大社前駅近くの、ぜんざい餅のお店にて。（下段右）こんな乗り物も電車内に持ち込めます。（下段左）出雲大社前駅にある映画『RAILWAYS』の伝言板。

出雲大社に行った帰りで、一畑電車には初めて乗ったそうです。やっぱり出雲は縁結びで話題になるそうで、今回は良縁を願って島根に来られたとのことでした。東京から飛行機で来たが、空港の名前が縁結び空港だったことも印象的だとおっしゃっていました。玉造温泉に宿泊し、縁結びの神社に行ったり、ホタルを見たことを話してくださいました。

島根の印象はゆっくりしているとのこと。一畑電車の印象を伺ったところ、黄色のかわいらしい電車で、愛着が持てそう、子どもも喜びそうと言っておられました。生活になじんでいて、愛される電車だなと思ったそうです。たしかに今回も、バタデンに向かって手を振る小さな子どもの姿が見られました。バタデンは、鉄道ファンにはもちろん、子どもにも人気があります！

今回の取材では、乗客の目線から一畑電車の魅力をお伝えしました。一畑電車は地元の人々の足であり、生活の一部だと思います。今も昔も変わらず、利用され、愛され続けています。よそから来られた方には、ぬくもりのあるバタデンにぜひ一度ご乗車いただき、島根の魅力を満喫されることをお勧めいたします。

（つじはた・ゆうこ／文化資源学系二年生）

## 一畑電車　駅めぐり編

実際に電車に乗ると、本数がそんなに多くはないため、なかなか降りたり乗ったりということがしにくく、駅をじっくり見ることが出来ません。そこで、七月十一日、今度は車で駅巡りの旅に出かけることにしました。

最初に辿り着いた駅は松江イングリッシュガーデン前駅です。ここは以前「ルイス・C.ティファニー庭園美術館前」という名で、日本一長い駅名だったそうです。今の名前も十分長いと思うけど……。

次の長江駅では、写真を撮って車に戻ろうとしたときにちょうど遮断機が鳴り始め、通り過ぎる電車を見送っていると、運転士さんがこっちを見てニコッと笑ってくれました。なんだかあったかい気持ちになりました。

次に向かった駅は秋鹿町駅です。私たちの他にも、買い物らしきおばあさんや一眼レフを持った男の人もおられました。この男性も鉄道ファンなのかなと思いつつ、駅の中に入ってみると、壁には秋鹿中学校の生徒さんが作った秋鹿地区だったそうです。もんぺをはいて、学校の名前が書いてあるハチマキや名札をつけて通っていたと、ゆっくりとした口調で当時の様子を話してくださいました。昔も今と同様に地元の学生の交通手段としてバタデンは走っていたのですね。

松江しんじ湖温泉駅に向かう帰りの車中でお話を伺ったのは、東京から観光に来られた二十代の女性二人組。ちょうど

たぶし　うんしゅうひらた　ぬのざき　いちばたぐち

の地図がはってありました。昭和五十八年と書いてあったので、結構年季の入ったものです。ホームに置いてあったレトロなベンチに座り、記念撮影をして次の駅に向かいました。

高の宮駅では、駅に向かう畑の間の狭い道で、電車から降りてきた少し腰の曲がったおばあさんに出会いました。「こんにちは、暑いですね」と声をかけると、予想以上に元気な声であいさつを返してくれました。高の宮駅は、「ここは本当に駅なのか……」と思うくらい小さな小さな駅でした。周りの民家、畑や田んぼの風景に、すごく溶け込んでいるなあと感じた駅でした。ジブリの映画に出てきそう!!

次に向かったのは津ノ森駅です。この駅は国道四三一号線沿いにあり、道路からホームがよく見えます。「チョコレートは明治」と書かれたレトロなベンチもありました。この日は天気がすごく良くて、ちょっと歩いただけで汗が出てしまうような暑さでした。しかし「絶好の駅巡り日和だ!!」と思いながら若さで乗り切りました。

■笑顔で話す高橋杏奈さん（右）。

次はいよいよ、あの映画『RAILWAYS』で何度も登場した伊野灘駅です。ここは車で駅の近くまで行くことができなかったので、田んぼのあぜ道を通って駅の裏側に行きました。小さい頃、田んぼでおたまじゃくしを捕まえてたなあと懐かしく思いながらあぜ道を走り抜けて、あの階段まで到着しました。実際にそこに立った私たちはいまいちピンと来なかったのですが、写真を撮った編集長曰く、「やっぱり雰囲気あるなぁ……」。

次の駅は、スイッチバックが行われる一畑口駅です。映画『RAILWAYS』の記念の看板が飾ってありました。「電車が来ればいいけどな、残念だね」と話しながら次の駅に向かおうとしたら、なんとタイミング良く電車が来てくれました!! 私たち、何か持ってる……と思いながら、急いでホームに入りました。前回乗った時のスイッチバックは写真もまともに撮れないぐらい慌ただしいものでした。しかし今回は打って変わって、とても余裕を持ったスイッチバックでした。

変電所がある布崎駅では、整備の方々が線路の清掃をしておられました。日差しがとても強い日で気温も高かったため、とても大変そうでした。変電所はすごく古かったのですが、中は電気がついており、普通に仕事をされているそうです。昭和二年に建設されたこの変電所は今年の一月、国の登録有形文化財に登録されました。

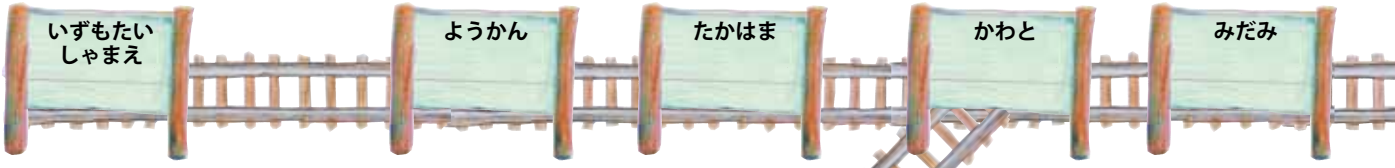
今回は雲州平田駅にある一畑電車の本社にもおじゃましました。ここで働いている本学卒業生の高橋杏奈さんにインタビューするためです。

高橋さんは今年入社二年目で、一年目は車両で観光案内などを行うアテンダントをされていました。今年から営業や企画の仕事をされていて、「ばたチャリツアー」のイベント企画にも参加されたそうです。

小学生向けの企画だったら小学校などを回って宣伝するなど、いろいろな所に宣伝活動に行きます。参加者の方から「楽しかったよ、ありがとう」などと声をかけられると、やって良かったなと実感するそうです。

一畑電車沿線で高橋さんのおススメスポットは粟津稲生神社だそうです。たくさんの赤い鳥居が並んでいて異空間への入り口のようにも思える、そんなちょっと非現実的な雰囲気を持つ神社です。

忙しい日々を送っておられる高橋さんですが、毎日充実しているとおっしゃっ



ていました。お話を聞かせていただいた後、デハニ50形の前で写真を撮りませんか?という予想外のお誘いが……。すぐ近くまで行って記念写真を撮りました。

ここでちょっと腹ごしらえをして、再び駅巡りに出発しました。次に向かったのは美談駅です。美しい談と書いて「みだみ」と読むそうです。この他にも一畑の駅には「旅伏駅」、「遙堪駅」など、普通には読めないような名前の駅がいくつかありました。

一畑電車では無人駅に、出雲神話の「国譲りものがたり」をテーマに制作された壁画を飾っています。沿線の中学校や個人の方が制作されたそうです。地域の方々には無人駅により親しみを持ってもらいたい、また出雲大社等を観光される方々にも目で見て楽しんでいただきたい、という願いを込めてこのような企画をされたそうです。この美談駅にも、出雲市立第二中学校の美術部の生徒さんが制作された壁画が飾ってありました。

次に向かった高浜駅では、今までの晴天が嘘のように、いきなり雷雨になりました。雨の中、なんとか写真を撮り、足早に次の駅へ向かいました。

遙堪駅に立ち寄り、最後はいよいよ出雲大社前駅です。この出雲大社前駅には、『RAILWAYS』の監督や出演者の直筆メッセージが書かれた伝言板が飾ってあります。「たまには帰ります」いうメッセージもあり、この島根を第二のふるさとのように思ってもらえたら嬉しいな、なんて思いました。

今回、バタデンの駅を巡ってみて、いろいろな駅、いろいろな方との出会いがあり、その一つ一つがとても充実したものでした。私はこの取材をするまで一畑電車にはほとんど乗ったことがなかったので、すべてが新鮮で楽しかったです。自転車と一緒に乗って、ぶらっと降りてサイクリングをしてみたり、電車から見える景色をゆっくり眺めてみたり、いろいろな楽しみ方があると思うので、ぜひ一度ご乗車ください。

（うえだ・えりこ／文化資源学系二年生）
（はらだ・みえこ／文化資源学系二年生）

■（上段）出雲大社号。（下段）川跡駅にて乗り換えをする乗客。

■田んぼのあぜ道を歩く三人。のどかな伊野灘駅。